〈PR〉 AGRI PROFESSIONAL

甘味資源作物交付金について

独立行政法人農畜産業振興機構が交付する「甘味資源作物交付金」は、鹿児島県と沖縄県のサトウキビ農家の経営の安定化を図る柱の一つです。生産者のサトウキビ生産による収入は、製糖工場からの販売代金とこの交付金（生産コストと販売代金の差額）で成り立っています。また、サトウキビ生産は製糖工場等の関連産業とともに地域経済の重要な位置を占めており、この交付金とは別に製糖工場にも製造コストと砂糖販売代金の差額を事業者交付金として交付しています。

甘味資源作物交付金の単価は、サトウキビ糖度を基準に設定されており標準的な糖度では、1㌧当たり1万6320円です。糖度が高いと加算される仕組みとなっています。

安定的なサトウキビ生産のために、甘味資源作物交付金をぜひご活用ください。

さとうきびの糖度が基準糖度帯の場合

お問い合わせ先 ▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶▶
特産業務部砂糖原料課 TEL03-3583-8960
鹿児島事務所 TEL099-226-4731 那覇事務所 TEL098-866-1033

詳しくは、当機構のホームページをご覧になるか、お気軽にお問い合わせください。
ホームページ http://www.alic.go.jp
alic 独立行政法人 農畜産業振興機構

農業プロフェッショナル VOL.4（全4回） サトウキビ

畜産との複合経営 こだわりの土づくりで高収量実現

サトウキビ 鹿児島県 大栄善享さん

鹿児島県の沖永良部島でサトウキビと子牛の生産の複合経営に取り組む大栄善享さん（48）＝写真＝。牛ふんにサトウキビの搾りかす（バガス）を混ぜて肥料にし畑に還元、サトウキビの主産地で循環型農業を先導する。島のサトウキビ生産量は、ここ数年で倍増しており、大栄さんの土づくりは島の基幹産業であるサトウキビ生産に欠かせない技術だ。

赤土を牛ふんで肥やす

同島は、サンゴ礁が風化した赤色の土壌を持つ。石灰質の岩盤の上に赤土が広がり、表層部は浅い。また、大栄さんのほ場がある島北部は台風等による潮風被害や干ばつ被害を受けやすく、この地域は、自然災害に強いサトウキビ作と畜産の複合経営が適している。大栄さんは「サトウキビが根を張る十分な深さが足りない分、牛ふんを使った良質な土づくりが欠かせない」と強調する。

大栄さんは育成牛7頭と成牛43頭を飼育する。5年ほど前に同県の南西諸島地域で、サトウキビの品種「農林22号」が導入されたのをきっかけに、サトウキビの栽培面積を倍近くの15㌶に増やした。「複合経営で規模を拡大し、循環型の農業を確立したかった」と振り返る。サトウキビの年間生産量は約1000㌧。

キビを無駄なく利用

収穫したサトウキビの青葉を飼料として牛に与える。枯れ葉は牛舎の敷きわらとして使い、枯れ葉と混ざった牛ふんにサトウキビの搾りかす（バガス）を加えてたい肥を作る。このたい肥をサトウキビ畑に10㌃当たり4㌧以上入れることで、化学肥料の量を通常の半分以下に削減できた。

「パチルス菌」が含まれる微生物混合飼料を牛に与えるのが特徴だ。「パチルス菌が繁殖したい肥で、病害虫に強いサトウキビを育てる。牛ふんのにおいも抑えることができる」と大栄さんはメリットを話す。

交付金が「生産を支える」

生産者のサトウキビ生産による収入は、製糖会社からの販売代金と独立行政法人農畜産業振興機構の「甘味資源作物交付金」。「良いサトウキビを作ると収入が上がる交付金の仕組みは、安心してキビ作りに取り組める」という。

大栄さんは、島北部の和泊町国頭の生産者らで構成する「国糖会」の会長を務める。同会で害虫対策を勉強し、長年の課題だったハリガネムシの新たな防除方法を実践。こだわりの土づくりに加え、この防除方法を島全体に普及したことで、島の製糖会社「南栄糖業㈱」の製糖実績は現在、原料処理量で約8万6000㌧。3年前に比べて倍増した。「安定した制度と栽培技術の向上が、島になくてはならないサトウキビの生産を支えている」と大栄さんは話す。